

非閉塞性冠動脈疾患でも心筋梗塞や死亡のリスクが高い

非閉塞性冠動脈疾患の有害転帰についてはほとんどわかっていない。そこで本研究では、全米コホートにおいて、閉塞性冠動脈疾患、非閉塞性冠動脈疾患、不顕性冠動脈疾患患者の心筋梗塞発生率および死亡率について比較検討した。2007年10月~2012年9月の退役軍人ヘルスケアシステムのデータベースから、冠動脈疾患の冠動脈造影検査を受けた者を対象とした。冠動脈疾患の既往のある者は除外した。所見に基づき、閉塞性冠動脈疾患（全病変で70%以上狭窄または左冠動脈主幹部50%以上狭窄）、非閉塞性冠動脈疾患（狭窄病変1以上、20~70%未満狭窄）、不顕性冠動脈疾患（20%を超える狭窄なし）に被験者を分類した。さらに、病変血管数でも分類し（1、2、3枝）、評価した。被験者37,674例のうち、非閉塞性冠動脈疾患患者は8,384例（22.3%）、閉塞性冠動脈疾患患者は20,899例（55.4%）、不顕性冠動脈疾患患者は8,391例（22.3%）であった。1年間の心筋梗塞による再入院率は、不顕性冠動脈疾患群の0.11%に対し、非閉塞性冠動脈疾患群および閉塞性冠動脈疾患群では病変血管数が多くなるほどその割合は高くなった。すなわち、非閉塞性冠動脈疾患群では1枝0.24%、2枝0.56%、3枝0.59%となり、閉塞性冠動脈疾患群では1枝1.18%、2枝2.18%、3枝または左冠動脈主幹部では2.47%であった。1年間の心筋梗塞発生率は、冠動脈疾患の病変が拡大するほど上昇した。不顕性冠動脈疾患群との比較によるハザード比は、非閉塞性冠動脈疾患群では1枝2.0、2枝4.6、3枝4.5となり、閉塞性冠動脈疾患群では1枝9.0、2枝16.5、3枝または左冠動脈主幹部は19.5となった。1年間の全死亡率も冠動脈疾患の病変拡大とともに上昇し、1.38%（不顕性冠動脈疾患群）~4.30%（3枝または左冠動脈主幹部の閉塞性冠動脈疾患群）にわたっていた。

したがって、非閉塞性冠動脈疾患患者は、明らかな病変を認めない不顕性冠動脈疾患患者に比べて1年間の心筋梗塞リスクや全死亡リスクが有意に高く、そのリスクは血管病変数が多いほど高くなることが示された。今回の結果は閉塞性冠動脈疾患の臨床的重大性を示すものであり、転帰改善のための介入についてさらなる検討の必要性が示唆された。

出典：Journal of American Medical Association. 2014; 312(17); 1754-1763